



大阪公立大学



「いま」と 「これから」を語る

受験生の皆さんに読んでほしい
大阪公立大学 インタビュー Book

森之宮キャンパス、2025 秋開設

【座談会】

- ・私たちの「まち」が生まれる 森之宮キャンパスで描く未来
- ・理系の魅力を女子学生に伝えたい！
大阪公立大学 理系女子大学院生チーム IRIS 第13期生 座談会
- ・海外での経験はきっと将来への糧になる
グローバルリーダー育成奨学金制度 第6期生 活動報告座談会

【インタビュー】

私たちのチャレンジ
「総合知」「共創」、そして未来へ
辰巳砂 昌弘 学長

「いま」と「これから」を語る

受験生の皆さんに読んでほしい

大阪公立大学 インタビュー Book

INDEX

- 主なキャンパス配置と設置学部・大学院 2
- 森之宮キャンパス、2025 秋開設 3
- 座談会** 私たちの「まち」が生まれる 5
森之宮キャンパスで描く未来 -ひと、共創、総合知-
- キャンパスライフ 11
- 特色ある入試制度 12
- キャリアサポート 12
- 座談会** 「理系の魅力を女子学生に伝えたい！」 13
大阪公立大学 理系女子大学院生チーム IRIS 第 13 期生 座談会
- 知を拓く大阪公立大学の「総合知」を体感する学び 23
初年次ゼミナールと副専攻プログラム
- 海外留学・国際交流 24
- 座談会** 「海外での経験はきっと将来への糧になる」 25
固定概念にとらわれない、世界で活躍できる人材を育成
グローバルリーダー育成奨学金制度 第 6 期生 活動報告座談会
- インタビュー** 私たちのチャレンジ 35
「総合知」「共創」、そして未来へ
辰巳砂 昌弘 学長

主なキャンパス配置と設置学部・大学院



2024年4月
中百舌鳥キャンパス
工学新棟・新センター棟 開設

2024年4月
杉本キャンパス
理学部新棟 開設

<看護新棟 完成イメージ>

2025年4月
阿倍野キャンパス
看護新棟 開設

2025年
りんくうキャンパス
新興・再興感染症をはじめ
都市の感染症対策に資する
施設を充実予定

2025年秋、森之宮 1期キャンパス 開設!
約6,000人の学生・教職員が集う
「教育・研究」の拠点

2028年(予定) まちびらきとともに 1.5期へ!
1.5期キャンパス、新駅、駅ビル、歩行者空間など「まちびらき」予定。

●都市シンクタンク機能
●技術インキュベーション機能
●イノベーションアカデミー事業の司令塔

森之宮キャンパス、2025 秋開設 ～ほかさまざまな新棟が完成！～

大阪公立大学（Osaka Metropolitan University：OMU）は、それぞれに約140年の歴史を持つ2つの公立大学、大阪市立大学と大阪府立大学が融合し、2022年4月に開学した公立大学です。大阪府と大阪市が設立団体となって発足した地方独立行政法人「公立大学法人大阪」が設置しています。阿倍野（大阪市）、中百舌鳥（堺市）、杉本（大阪市）、羽曳野（羽曳野市）、りんくう（泉佐野市）に5つのキャンパス、梅田となんばにサテライト、交野市に附属植物園を有しており、学問領域では12の学部・学域と15の大学院研究科【※】を擁する総合大学です。



2025年秋には、森之宮キャンパスが開設され、国際基幹教育機構、文学部、文学研究科、医学部リハビリテーション学科、リハビリテーション学研究科、生活科学部食栄養学科、生活科学研究科食栄養学コースが移転します。また、全学部・学域の基幹教育を森之宮キャンパスにて実施します。



<エントランスピロティ>



<ステージスクエア>



<森之宮キャンパス工事状況（2024年6月26日時点）>

校地面積は約19,300平方メートル、校舎面積は約77,100平方メートル。コンセプトを「知の森」とし、地上13階建、高さ約60m、大阪城天守閣から見て生駒山の稜線をこえない高さとしています。中庭からは大阪城を眺めることができます。また、3層からなるピロティを支える伸びやかな形状の「樹形柱」、外壁に「コモレビスクリン」なる縦型ルーバーを配置することで強い日差しを適度に遮り、やわらかな光を建物内部に取り入れる計画です。



<杉本キャンパス理学部新棟>

また、森之宮キャンパス以外にも、杉本キャンパス理学部新棟（2024年4月開設）、中百舌鳥キャンパス工学部新棟および新センター棟（2024年4月開設）、阿倍野キャンパス看護学部新棟（2025年4月開設）など、各キャンパスでもさらなる機能充実をめざした新棟建設が進んでいます。



<中百舌鳥キャンパス工学部新棟>



<阿倍野キャンパス看護学部新棟>

加えて、同じ法人により寝屋川市に大阪公立大学工業高等専門学校（高専）を設置していますが、2027年以降に中百舌鳥キャンパス（堺市）への高専移転を予定しており、大阪公立大学、特に工学部との連携・接続を強化していく予定です。高専と大学の学生が同じ敷地内で学ぶ環境は全国的にも珍しく、強みへとすべくさまざまな構想を進めています。

大阪公立大学の新しいキャンパス、新しい学舎での学びをぜひ目指してみてください。

【※】12の学部・学域と15の大学院研究科
 (学域) 現代システム科学域
 (学部) 文学部/法学部/経済学部/商学部/理学部/工学部/農学部/獣医学部/医学部
 看護学部/生活科学部
 (研究科) 現代システム科学研究科/文学研究科/法学研究科/経済学研究科/経営学研究科
 都市経営研究科/情報学研究科/理学研究科/工学研究科/農学研究科/獣医学研究科
 医学研究科/リハビリテーション学研究科/看護学研究科/生活科学研究科

座談会 私たちの「まち」が生まれる 森之宮キャンパスで描く未来 ーひと、共創、総合知ー

参加者：<学 生> リハビリテーション学研究科 博士前期課程2年 橋本 朋子さん
 医学部リハビリテーション学科 理学療法専攻1年 門脇 真歩さん
 生活科学部 食栄養学科1年 八木 玲子さん
 <教職員> 辰巳砂 昌弘 学長
 沼田 里衣 文学部准教授
 牧 直 施設課（阿倍野）係長

※所属・学年は取材当時

■森之宮キャンパスには新しい機能や魅力がいっぱい

辰巳砂：森之宮に学生の皆さんをお迎えできるのは2025年秋ですが、全ての大阪公立大学1年生がこの新キャンパスに集まりますので、とても楽しみにしています。

大学キャンパスがこのような状況にあることは稀有で、一般的な状況では入学前に訪れて学内のいろいろな施設や学生の活動を見学することができますが、森之宮キャンパスにはまだ何もありません。一方で、約5,000人の学生さんが「ここからすべてが始まる」という経験を味わっていくわけです。それは非常に価値があり、素晴らしいことだと思っています。

大学は専門的な知を学んでいくというのが基本ですが、その一方で私たちの大学は「総合知」を重視することを掲げています。世の中にはいろんな人がいて、それらが一堂に会しているところに自分も身をおくということから始まる、つまり森之宮キャンパスという新しい場所に新しい人が集まって多様な知識、価値観を体感できるというのが、とても重要なことだと思います。自分と考え方が違う人たちが集まってそこでリアクションしあっていくというのが大切だと思うのです。

牧：杉本キャンパスや中百舌鳥キャンパスは学部、用途ごとに建物が独立していましたが、森之宮キャンパスでは一つの建物、1階から7階までが基幹教育、8～9階がリハビリテーション学、9～10階が食栄養学、11～12階が文学の教室、研究室、実験室等や、食堂、売店、図書館、スポーツ施設のアリーナ、サブアリーナなどを備えた非常に大きな建物になっています。一つの建物なので、天候に関係なく移動が容易に出来ます。

日常の中で動線に図書館が有りますので、授業と授業のあいだで図書館に立ち寄って調べものなどが出来ます。たくさんの本があるので、調べもの以外でも、本との偶然の出会いがあるかも知れません。

また森之宮キャンパスには非常にエネルギー効率の良い空調や照明を入れております。照明についてはLEDで、トイレ、廊下、階段などには人感センサーを入れてあります。また、教室には明るさセンサーを入れており明るすぎる場合は自動で照度を下げます。

キャンパスには「中浜下水処理場」が隣接しているのですが、水の超高度処理をやっています、高度処理された水が一定の温度で供給されます。夏には外気よりも冷たく、冬には外気よりも温かいというわけで、この熱を冷暖房の空調に利用して省エネを図ります。こういう面で、環境にやさしい建物になっています。エレベーターも多くの台数



を設置しますが、1階から7階まではエスカレーターも設置しますので、他のフロアへの移動はスムーズにできると思います。また、目に見えない部分ですが、防災、空調、照明などの設備については設備統合ネットワークを組んでおり、防災センター等から一元管理・制御できます。同時にさまざまなデータを集約しているので、これらのビッグデータを活用してどのように拡張・発展させていくかという点は、これから期待ができるテーマです。

辰巳砂：学生や教員のアイデアや自由な発想で、それらの統合ネットワークを活かした新しい研究にぜひチャレンジしてほしいですね。

牧：そうですね。このように意図して一元化管理した統合ネットワーク環境はなかなか無いと思いますので、何か新しいことに活用いただけるのではないかと期待しています。

■森之宮でアップデートする学生生活

橋本：私はリハビリテーション学を修める大学院に在籍していて、学部生のときから森之宮キャンパス近隣で研究を進めています。近くの団地の周辺マップを作り、住民の方々に「公園を一周したら何歩です」「このコースを歩いたら何キロで、何歩ぐらいになります」というような情報を提供し、高齢者の方々の健康増進に運動履歴や歩数がどう関係するかというような研究を行っています。



踏まえて、運動教室やスマホ教室などの「集まれる場」を企画しました。森之宮キャンパス予定地の周辺住宅（約3,000戸）にチラシを配布し、これまでにのべ100名ほど参加されています。教室企画と同時に体力測定会も実施して、その結果や分析などは日本地域理学療法学会学術集でも発表させていただきました。また、森之宮地域で実施されるイベントにもお邪魔し、測定

会を開いています。メインは歩数や「活動強度」を上げていく活動です。森之宮キャンパス近隣エリアの高齢化率は35%を超えており、高齢で独り暮らしを余儀なくされた方が入居される例も少なくないそうです。

地域の方々はキャンパスができることをとても楽しみにしておられるようです。読書家の人もおられ、文学部が森之宮に来ることや、図書館でいっぱい本が読めることにはとても期待しておられますし、キャンパスに行くことが楽しみだという声もよく聞きます。とくに若い人と触れ合えるのをすごく楽しみにされているようですね。私自身は森之宮キャンパスが開設する頃には大学院を修了しており、実際に森之宮キャンパスで通い学ぶことは無いのですが、後輩となる学生たちが地域の人たちと交流できればいいなとも思っています。キャンパスの近くに多くの団地があり、通学や通勤の道すがら触れ合う機会も多くなるでしょうから、気軽に声をかけあえるような、そんな関係ができればと期待しています。学生にとってもいい経験になるでしょうし、地域の人たちにとっても学生や教職員と会話できるというのはすごく大きな変化、刺激になることだと思います。また、森之宮キャンパス開設などの動きに関連して近くに大阪メトロの駅もできますので、それを楽しみにしておられる地域の方もいらっしゃると思います。

辰巳砂：私も、大阪公立大学が大切にすることとして、「垣根のない大学」であることを目指しています。中百舌鳥キャンパスは大阪府立大学時代の方針を受け継いで特にそうですが、いつでも気軽にお越しください、一緒に何かやりましょうという考え方、つまり「外に開かれている大学」ですね。ですので森之宮キャンパスでも、ライブラリーなどは特にそうですが、いつでも気軽に利用できる環境にしたいとイメージしています。近くの団地にはきっと学生も住むでしょうし、今おられる住民、

特に高齢者の方々と交流も自然と始まっていくでしょう。「地域のみなさんとともにある大学」という姿を学生や教職員の皆さんと気持ちを合わせて目指していきたいと思っています。

また、森之宮キャンパス予定地の近隣には、今は団地や下水処理場などがありますが、まだあまり何もない場所、と言っても過言ではないかもしれません。そこに新しく「まち」を作ろうとしている、ということが



このキャンパス周辺の大きなポイントです。「大阪城東部地区まちづくり検討会」という、このエリアのまちづくり全体を考える協議体があります。大阪府市、UR、JR西日本、大阪メトロ、本学を設置している法人（公立大学法人大阪）が参加していますが、この地区を次世代型キャンパスシティ、スマートシティの実証・実装フィールドを担うまちとして開発していこうと議論されています。大阪公立大学をそのヘッドクォーターつまり司令塔として位置づけ、森之宮エリア全体を人の集まる「まち」に育てていく、本学森之宮キャンパスはその中心地になっていくだろうと思っています。

これは5年10年で出来ることではありませんが、その準備として本学では「イノベーションアカデミー」という事業を始められています。産・学・官・民の四者が集まって、さまざまな社会課題の解決に向かって共に進んでいきたいと思います。いわば「共創」です。そのためにも大学としては「総合知」と「共創」を掲げ、社会の課題解決に向かっていくイノベーションエコシステムのヘッドクォーターとして森之宮キャンパスを位置付けています。

そのためには、いろいろな人が集まって、多様な人が多様な意見を持ち寄ってこれることが必要になります。技術だけではなく、人間そのものを研究することも必要です。いろいろな人が「総合知」を出し合っていく、そういう場にしたいと考えています。

門脇：私は理学療法学専攻で、いまは杉本キャンパスで週2日、羽曳野キャンパスで週3日の割合で学んでいるのですが、2年次からは全て羽曳野キャンパスで専門科目を学ぶことになっています。3年次の秋からは森之宮キャンパスが開設される、というスケジュールです。

今は基本的な形態機能学いわゆる解剖学や評価学、基礎運動学などを学んでいます。1年次前期は座学が中心だったのですが後期からは実習が始まり、学生同士で骨のかたちや筋肉の様子などを確かめあうような実習も始まっています。私はパラスポーツに興味がありますので、上の年次でさらに専門的な分野を学ぶのが楽しみで、特に2年次で学ぶ「障がい者スポーツ指導論」という全国でも珍しい授業があるので、とても楽しみにしています。

八木：私は生活科学部の食栄養学科です。食栄養学科は2つのクラスに分かれていて、2年次からは羽曳野キャンパスで週4日、杉本キャンパスで週1日、専門の授業を受けることになるのですが、今は学科の同級生全員が杉本キャンパスで授業を受けています。前期は基礎科目が多かったのですが、後期は専門科目が増えてきました。

栄養学と言うと、たとえばタンパク質がどれだけ必要かとか、ビタミンが不足したらどうなるのかというような内容を想像すると思うのですが、そういった応用栄養学以外にも栄養素そのものの化学的な構造や体内で起こる代謝の化学反応など、基礎的かつミクロなことも学んでいきます。たとえばダイエットでなぜ糖質を抑えてタンパク質を摂るのがいいのかなど、身近な事例を理論的に理解できるのが楽しいですね。

また、私はいま、食の観点から病気を予防することに関心があるので、食行動や食内容の背景にある環境、つまり家族形態や生活習慣などの食につながる環境全体について専門的に研究していけたらと考えています。

■森之宮キャンパスでの生活で楽しみな事、気になる事

沼田：私は文学部で教えていますが、もともとは音楽を学んでいました。文学部に所属してみて、いかに多様な「知」が「文学」の枠内に詰まっているのかと驚くとともに、とても勉強になっています。例えば、大阪の地に歴史的に育まれた伝統芸能「文楽」を学問的体系の下に学ぶ「上方文化講座」などは一般向け講座としても大変面白く、森之宮キャンパスでも引き続き開催予定と聞いております。また、図書館でも講談本や古文書を展示して、市民に開かれた学びを企画中という話を聞いております。私は文化構想学科の中の「文化資源コース」を担当しています。ここは文学領域の中でも異色の学科・コースなんですね。どういうふうに関心かと言いますと、文学部では、どちらかと言うと「過去の知」について勉強するという側面が中心ですが、この学科・コースでは未来に向けてどんなものを創っていくかという観点、自分たちでどういう風に文化を構想していくのかという観点、つまりは未来形で学びを捉えるという点が特徴だと思っています。未来を考えるには、歴史を知る、つまりこれまではどうだったのを考えることも大事なので、文学部の多様な知を学びつつ、領域横断的に未来志向で実践につなげていく学びの方向性は非常にいいなと感じています。

文学部も森之宮キャンパスに行くということで、さらに多くの人が集まりやすい環境になるのが魅力的だと思っています。とくに私は音楽を専門としていますので、アップライトピアノやその他の楽器も用意して子どもから高齢者、障がいのある人など、多様な人に来ていただきたいと思っています。アクセスのいい環境になりますので、そこでどんな人たちが集まって、どんな音楽が一緒にできるか楽しみです。



建物1階の学生ラウンジにピアノが設置されると聞いています。もしパフォーマンス空間ができるのであれば、いろんな方とそれぞれの「表現」というものを共有しあう場ができれば、それこそ学長がさきほどおっしゃっておられた「多様な人が集まるということ」がどういう意味なのか、どういう価値観を共有できるのかということを学ぶ場にもなっていくはずで

音の活動というのは音を出すだけではなく、それに付随している対話が行われることでもありますので、その対話のなかで、都市のいろんな課題が共有されたり、それをともに探求していったりということにも広がると思います。まさに森之宮キャンパスが実践・交流の場になるのかなと思っています。

気になるどころと言えば、そうですね、アート系の実践の場合、結構「余白」というものが大事になってくるので、あまりにきちんと規定されてしまうと、表現が枠に収まってしまうという側面があります。一定の規定やルールの中に、どういう風にもアレンジできる「余白」があれば、そこから何か思いがけないものが創造されるのかなと思っています。安全であるのは前提で、とても大切ですが、一方で「余白」の枠内で大胆に試せる、挑戦できるという空間が保証されたらいいなと思います。

門脇：羽曳野キャンパスはリハビリテーション学と看護学の教員と学生、あと職員で構成されていて、分野の性格的に病院や施設に実習に出ることも多いので、他のキャンパスと比べると人が比較的少ないキャンパスです。森之宮は新しいキャンパスで、地域の方も含めた利用者も多く、また多様な人が出入りするということのを伺い、とても楽しみにしています。羽曳野キャンパスでは食堂も利用者が少なくメニューも少ないのが難点ですが、杉本キャンパスで学ぶ日は食堂も賑やかで行列ができていたりして、その雰囲気は大好きです。そういう「これぞ大学」という風景が森之宮キャンパスでも見られるかと思うとワクワクしますし、友人とも楽しみにしています。あとは、私が住んでいる場所からのアクセスの良さにはとても期待できますね。

羽曳野キャンパスのみならず、うちの大学の各キャンパスには大阪府の北部や兵庫県から来ている人も多いので、そういう学生にとっては森之宮キャンパスのアクセスの良さは魅力だと思います。また、JR環状線や大阪メトロからのアクセスも良いので、早く森之宮キャンパスができれば良いなと思っています。13階など上の階まで上がるのに、エレベーターが混んでいたり



数が少なかったら大変だなと思っていましたが、先ほどエスカレーターもあるとお聞きしてホッとしました。また、リハビリテーション学の研究室に来る人の中には車椅子の方もおられるでしょうから、エレベーターが複数整備されるのは助かります。

あと気になることですが、羽曳野キャンパスにはバスケットコートが2面とれる体育館があります。羽曳野ではキャンパス全体の利用者も多くないので、比較的すぐに予約もとれるのですが、多くの利用者がいる森之宮キャンパスのアリーナではそういった事情がどうなるのか、少し心配です。

牧：森之宮キャンパスはアリーナ、サブアリーナでバスケットコートが3面とれます。所管は、都市健康・スポーツ研究センターになり、どういったかたちで運用していくのか、これからの課題だと思います。

門脇：ほかの学部の方とか、ほかの部活・サークルの方と一緒にキャンパスで日常を過ごすのは嬉しいことなのですが、施設がなかなか使えないとなると、例えば私たちの学部がいま取り組んでいるポッチャ部の練習をうまく進めていけるのか、少し不安です。ポッチャ部やASC（Adapted Sports Club）の活動では外部から練習に参加される障がいのある方もおられるのですが、羽曳野から場所が変わって森之宮まで来ていただけるのかどうか、またどれくらいの頻度で活動できるのか、学生たちと一緒に利用できるのかどうかなども心配事項です。

八木：私も、期待することはアクセスの良さですね。兵庫や京都方面、それに奈良や和歌山など近畿南部も含めてさまざまな地域から通学する学生が多いので、大阪メトロとJRの両方でアクセスが良いのはとても便利です。

杉本キャンパスでも中百舌鳥キャンパスでもだいたい学部によって棟が分かれています。森之宮キャンパスでは教室も図書館も食堂でも、他学部の人や地域の方々とも一緒になって交流できるのが楽しみです。ホールにあるピアノを囲んで食事なども楽しめる空間が作れたら楽しいと思います。私の専門分野ですが、食事は人と人の垣根も崩してくれますから。そういう空間で、多様な方々との交流が深められるのではと思います。

ほかの分野の学生との距離が物理的に近くなると、例えば文学部の心理分野などリハビリテーション学は栄養学とつながる部分も多いと思うんです。ですので、一緒に学んだり何かのプロジェクトに取り組んだりできるようになったらいいと思います。

また、私も気になる点は部活・サークル活動です。1年生は全員が森之宮キャンパスで過ごす聞いておりますが、今は多くの部活・サークル、他の課外活動は杉本キャンパスや中百舌鳥キャンパスなどを中心に活動しているので、いきなり拠点を森之宮に移すのは色々難しいことが出てくると思います。そうすると、4限、5限まで授業があることの多い1年生が、授業が終わってから違うキャンパスまで移動するのは時間的にも金銭的にもロスも多くて、たとえば新入生歓迎会にもなかなか行けないということが出てくるかなと思っています。森之宮にいろんな人が集まるというのはいいのですが、キャンパス間の交流には少し心配しています。いま、杉本キャンパスと中百舌鳥キャンパスの間は、大学がバスを走らせてっていますが、森之宮キャンパスが開設した時に、他のキャンパスをつなぐバスはどうなるんだろうとか、気にしています。

■未来の公立大生へ

橋本：森之宮はJR環状線で梅田にも天王寺にも出やすく、大阪メトロでも梅田や本町、心斎橋やなんばに出やすいところです。医療分野で考えると、森之宮にリハビリ学があって阿倍野に医学と看護学があり、相互の連携が取りやすい位置関係です。また、遊んだりバイトをする場合にも便利です。大学にせっかく4年間も通うのであれば、それらの場所の良さを活かして全力で学生生活を楽しんでほしいと思います。

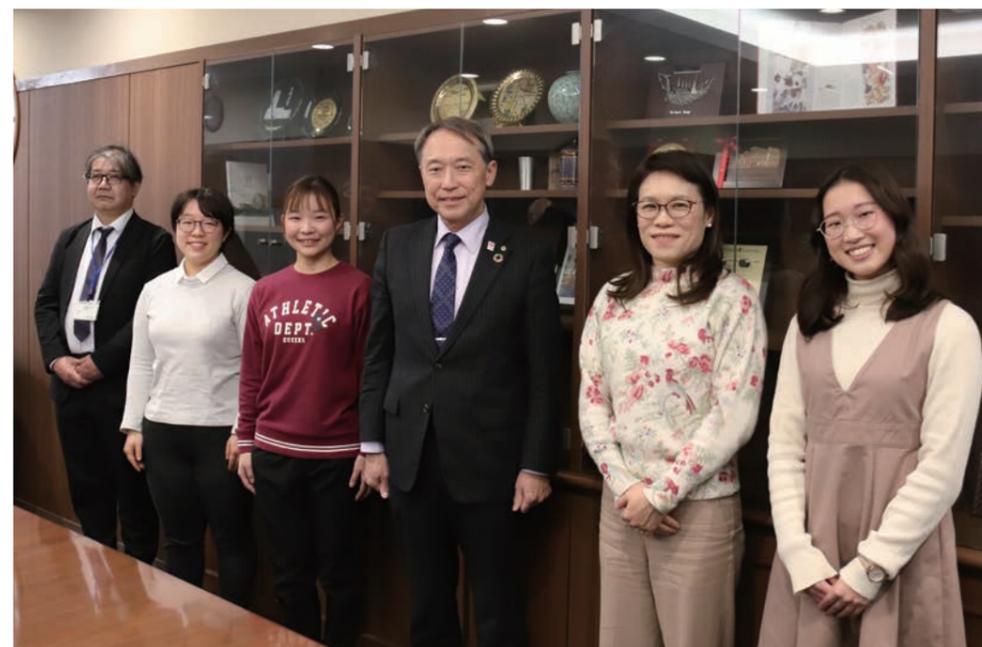
牧：森之宮キャンパスは1つの建物のなかに色々な施設や機能があるので、移動時間の節約にもなります。節約できた時間を違うこと、例えば勉強や課外活動、交流などに充てることができるでしょう。都心にあるキャンパスの利便性をうまく使っていただけたらと思います。

辰巳砂：気になることも出させていただきました。部活・サークル活動などはそうですね。いくつかの混乱も当然出てくるでしょうが、過渡的な話と捉えてみんなで話し合っていけたらと思っています。大学がこれからどんどん変化していく…、大学だけではなく、そこに「街」ができていく…、その過程を森之宮キャンパスに集う学生さんたちは目のあたりにするわけです。そういった大きな変化の中に自分自身がある、大きな流れを目にしてきた生き証人になるというのは、ほかの大学の学生ではなかなか経験できないことだと思います。森之宮キャンパスから始まる4年間の大学生活というのは、来ていただいた学生さんそれぞれにとって大切な記憶になるのではないかと思います。

門脇：いろいろと気になる点もあったのですが、先ほどの学長のお話を聞いて、それ以上に多様な人が集まって、「まち」が創られる中で、学べることも多くなると感じました。

八木：アクセスが良いということは、卒業した後も訪れやすいということでもありますね。「まち」がどんどん大きくなっていく様子を定期的に感じて、学生として自分が過ごしていたころから「まち」はこんなに変わったんだと見届けられることは本当に楽しみです。

一同：ありがとうございました。



キャンパスライフ ～さまざまな課外活動や教育プログラム

■課外活動

本学の課外活動団体には、スポーツ、文化、音楽、ボランティア、国際交流など、さまざまな分野で100を超えるクラブ・サークルがあります。



交響楽団



チーム朱蘭



Forca RINKU



奇術部 Jenga

■ボランティア活動

ボランティア活動を通じた学生の自己発見や市民性の育成を目的として、「ボランティア・市民活動センター（通称「V-station」）」も学内に設置されており、学生が自主的にさまざまなボランティアプログラムに参加・挑戦しています。



V-station 活動風景（援農活動および都市農村交流）

■教育プログラム

国際基幹教育機構の高度人材育成推進センターでは、アントレプレナーシップやスタートアップ育成に関する教育プログラムも提供しています。本学の学生だけでなく、他大学の学生、社会人、高専生や高校生もオープンに参加できるものがあり、学部・学域の枠だけでなく、大学の枠も超えて学び合うことができます。

特色ある入試制度 ～特別選抜制度

入試制度面でもさまざまな工夫を重ねています。多様な方に入学していただくため、大学共通テストと個別学力検査による一般選抜に加え、さまざまな形式の推薦型選抜や特別選抜（※）を設けています。詳しくは大学 Web サイト「入試情報サイト」内、入試情報＞特別選抜のページをぜひチェックしてみてください。

（※）特色ある入試制度（2024年度の内容であり、今後変更となる可能性があります）

- 専門学科・総合学科卒業生特別選抜
- 総合型選抜
- 国際バカロレア特別選抜
- 学校推薦型選抜
- 産業動物獣医師地域枠特別選抜
- ユネスコスクール特別選抜
- スーパーサイエンスハイスクール（SSH）特別選抜など

詳しくはこちら↓



キャリアサポート ～充実のサポート体制

本学では、年間を通じて就職ガイダンスや企業セミナーなどを実施し、自分自身の将来と向き合う機会を提供。1年次からのキャリア形成支援、企業と連携した支援、一人ひとりに寄り添った個別相談など、学生の特性や希望に合った進路を主体的に選択できるようさまざまな支援を行っています。そして、多様な時代変化やその課題に対応し、社会に活躍できる「人間力」をもった人材を輩出していきます



就職ガイダンスの様子



キャリア支援室（杉本キャンパス）



キャリア支援室（中百舌鳥キャンパス）

座談会 「理系の魅力を女子学生に伝えたい！」 大阪公立大学 理系女子大学院生チーム IRIS 第13期生座談会

地域に理系女子を増やすために、さまざまな活動に取り組んでいる「大阪公立大学 理系女子大学院生チーム IRIS」第13期生による座談会。理系を志望した理由や受験勉強法、大学院での研究、IRISでの活動内容についてお話しいただきました。

<座談会参加者>

松本 朋子さん 農学研究科 応用生物科学専攻 博士後期課程1年

浅田 統子さん 工学研究科 物質化学系生命系専攻 化学工学分野 博士前期課程2年

安藤 美玖さん 医学研究科 医科学専攻 修士課程2年

森田 万葉さん 工学研究科 航空宇宙海洋系専攻 海洋システム工学分野 博士前期課程2年

ファシリテーター

巽 真理子 女性研究者支援室 総括コーディネーター / ダイバーシティ研究環境研究所 客員准教授

※所属・学年は取材当時

■理系女子大学院生チーム IRIS 設立の経緯

巽：大阪公立大学 理系女子大学院生チーム IRIS（アイリス）は、2011年に大阪府立大学で結成されました。地域の身近な理系女子のロールモデルとして、オープンキャンパスでの進路座談会や、地域での進路講演会、IRISサイエンス・キャンパス（科学実験教室）などの活動をしています。2022年度から大阪公立大学に引き継がれました。

IRIS誕生のきっかけは、大阪府立大学が2010年に文部科学省科学技術振興調整費（現・科学技術人材育成費補助事業）「女性研究者支援モデル育成」に採択され、女性研究者支援センターが設立されたことでした。この補助事業は、理系の女性研究者への支援が大半でしたが、女性研究者を増やすためには、まずその卵となる大学院生を増やす必要があると考え、2011年に



始めたのが IRIS への活動支援でした。この支援の目的は、IRIS 自身が企画から運営まで主体的に活動できる場を作ることにより、成長の機会を提供することです。IRIS の名称は、第1期生が名付けたもので、I'm a Researcher In Science. の略です。IRIS 自身が互いに刺激しあい、成長することを目標に、大学院生としての研究との両立をはかりながら活動しています。活動の中心は、地域に出向いて行う実験教室「IRISサイエ

ンス・キャンパス」と女子中高校生を対象に行う「進路講演会・座談会」です。サイエンス・キャンパスは2011年～2022年の12年間に大阪府内の17市1町で92回開催し、のべ4,796人（保護者含む）が参加。小・中・高校生に科学の楽しさや面白さを広める活動をしています。

理系への進路に興味がある女子高校生に経験を話す進路講演会・座談会は、結成当初から大阪府立大学のオープンキャンパスで実施してきました。大阪公立大学となった2022年からは地域からの依頼にも応じており、1年間に5会場で7回開催し、のべ178人が参加しました。

IRISが講師として活躍する姿を見せることで、地域の小・中・高校生にとっては、身近な理系女性のロールモデルとなり、保護者の方々が「男子は理系」から「女子も理系」へと意識改革していただくことが期待されています。

イベントの企画・準備・運営は、女性研究者支援室の支援を受けながら、メンバー自身が行います。それぞれの専門知識を活かしつつ、小・中・高校生に向けて「どのような内容・手順で説明すると、自分たちが伝えたいことが参加者に伝わるのか」という問題について試行錯誤しながら企画し、異なる研究分野のメンバーと話し合うことで、サイエンス・コミュニケーションに大切な視点とスキルが育まれます。

また「日経STEAMシンポジウム」のコンテスト出場や、堺市教育委員会が実施する「企業による学びの応援プログラム」への参加など、企業や行政機関と連携した活動にも積極的に取り組んでいます。2023年度は第13期生48人がIRISとして活動しています。

■理系の学問を志した理由は？

巽：まずは理系をめざした理由からお聞かせください。

浅田：理系への進学を最終的に決断したのは、高校1年生の進路選択時です。私の場合は文系と理系それぞれにやりたいことがあったので、本当に最後まで迷いました。文系では教育学部を志望していましたが、理系に進んでからでも受験できるので、将来の選択肢を広げるために進学を決めました。

松本：親が爬虫類好きで、昔から一緒に昆虫採集に出かけることが多く、そこから生物が好きになりました。府立大には日本一の植物工場があると知り、農学部を選びました。

安藤：小学生の頃から病院での仕事に憧れていましたが、高校の時に見ていたドラマで、患者様が持つ少ない情報を元に検査する臨床検査技師という職を知り、志望しました。臨床検査技師とは血液検査や生理検査、心電図検査、採血といった全ての検査に携わる「検査のプロ」です。文系出身でも臨床検査技師になれますが、勉強する過程で理系の内容が必要になるため理系に進むことにしました。

森田：国語が苦手だったため文系という選択肢が頭になかったです。機械系は、仲の良い塾のチューターからのアドバイスもあって決めました。思い起こしてみると、幼少期から大好きなLEGOが応用できそうな学部はどこだろうかと感じた感じで決めた気がします。

■勉強のやる気が出ない時の対処法

巽：大学受験時に費やした勉強時間を教えてください。またやる気がなくなった時に工夫していたことがあれば教えてください。

浅田：勉強時間は10時間以上確保していました。塾には高校3年生から1年間通いましたが、家や学校での勉強がベースでした。勉強のやる気が出ない時は、モチベーションが復活するまで、頭を使わずにできるタスクに取り組んでいました。例えばデータ整理やノートの体裁をきれいに整えることなど、手さえ動かせば完成できる作業。高校の頃だとノートをまとめるとか、教科書をもう一度読み直すなどの勉強ですね。先々やる気がなくなることを見越して、あえてタスクを残しておくことは今でもやっています。

松本：やる気が高めるために「架空のライバル」を設定して「あの人以上は勉強するぞ！」と気合を入れていました。少林寺拳法の部活動やピアノの習い事にも取り組んでいたため、勉強時間は限られていました。でもその分しっかり集中できたし、いろいろ取り組んでいたことが生活のメリハリと、勉強へのモチベーション維持につながっていたのだと思います。ちなみに少林寺拳法では大阪1位になり全国大会にも出場しました。なぜ「架空のライバル」を作っていたのかというと、私がストックすぎて「休もうよ」と誘ってくれる優しい友だちが多く、ライバルという存在ではありませんでした。レベルアップのためには「すごい人はたくさんいる！」とイメージして勉強を頑張ろうと考えました。

安藤：高1、2年生の時は琴の部活をやっていたので、学校での勉強を大切にしていました。たとえばテストで結果が出なくても勉強の成果は残るから、毎日着実に理解を深めようという意識で取り組んでいました。だから試験直前にあわてて猛勉強したことはなかったです。自分自身、試験直前に焦るとするのが苦手なんです。絶対クリアすべき問題や勉強量を越えた先に起こるやる気が出ない時は「なぜ私はそこをめざしているんだろう？」と自問自答していました。その上で「やったほうが良いよな、後で自分が喜ぶよ」とプレッシャーをかけて机に向かいました。



森田：勉強量は高校3年間で異なりましたが、毎日朝のルーティンとして、脳がリフレッシュしている起床後に数学の問題を1問解いていました。塾はわりと好きだったので週4ほど通っていました。やる気が出ない時は、屋外を1時間くらい走っていました。そうすると「しんどいから、勉強しよう」という気分になります(笑)。もう1つは、隔週金曜の学校帰りにマスクテープを1つ購入するというご褒美を作り、モチベーションをコントロールしていました。

■学生時代のアルバイトは貴重な経験

巽：学部時代はどんなアルバイトをしていましたか？

森田：小学4年生から通っていた塾のチューターを週に一度。それと自宅の近所のコンビニを大学2年次から今も続けています。また3年次でオンライン授業ばかりだったときは、近所の学童保育の施設にもアルバイトとして行っていました。コロナ禍で大学に通学できなかったため、私にとってある意味通学でした。

安藤：大学1、2年次の時はダイニングバーに勤めていました。同時期に、着物の着付けが身に付くという誘い文句にのせられて、懐石料理店で接客のアルバイトも始めました。大学院進学後も在籍していましたが、体力的にきつくなって辞めました。その後、検査技師の資格を活かして1年半くらいPCR検査のアルバイトをしていた時期もありました。今後は就職が決まっている病院でアルバイトとして勤めるかもしれません。

松本：まず出身高校の自習室に在室するチューターのアルバイトをしていました。その後は地元の塾で個別教室の講師を週2回、

今でもやっています。個別教室では中学3年生と高校生の計4人を担当しています。普段の研究や勉強にメリハリができるのがいいですね。生徒のみんなもかわいいです。

浅田：初めてのバイトは、各カテゴリーでの受験をめざす幼稚園生と小学校低学年への幼児教育でした。その後は、職人向けの道具屋さんでの接客や、選挙の受付、巫女さんなどあらゆるアルバイトをしました。今は中学生を対象とした塾に勤めています。

巽：皆さんいろいろなアルバイトをしているんですね。学部時代は授業や勉強との両立はできていましたか？

一同：(うなずく)

■理系の学びの魅力とは？

巽：皆さんの専攻について教えてください。選んだ理由やよかったこと、苦労したことを教えてください。現在の研究テーマでもかまいません。



浅田：出身大学である大阪府立大には化学工学分野という専攻がありまして、それが全国でも珍しいと入学時に聞いていました。2年次で専攻を検討する際に、希望者が少なく、就職に強いと聞いていたので同分野に決めました。それに一緒に所属を考えていた同級生たちが自分に似て真面目なタイプで、勉強をサボれるような間柄ではなかった。その雰囲気が自分の中でとて

も心地よかったんです。ここで頑張れば充実した大学生活が送れると思いました。

化学工学的な学問を扱う研究室は全国にも複数ありますが、それを学部の1年次から4年次まで取り組み、大学院でもう一度体系的に学ぶことができるのが珍しいです。学部時代の学びが下積みされて基礎知識が備わっていますし、たとえ欠落している部分があっても大学院での学びで補えると知りました。

化学工学分野に面白さを感じるのは、研究内容がものづくりの最先端である製造分野に幅広く活用されている点です。化学工学は様々な化学的、物理的变化を含むプロセスの解析、設計、開発のための工学であり、対象とするシステムを包括的な視野で合理的に評価、設計します。私の研究は、大腸菌を用いて都市鉱山といわれる廃電子機器から貴金属を回収するものですが、実用化するためにこのリサイクル技術の全プロセスの最適化を検討しています。苦労したことは、得意ではない物理や数学に注力するため、そういう意味では上級の物理化学に向き合わなければいけないというのがありました。

松本：研究をひと言で表現するなら「植物の細胞内をガン見」しています。植物を扱う課程への進学の手は担当の先生から誘われたことが大きかったです。植物工場での研究は副専攻の課程で満足したので、その先の細胞内を可視化するミクロな研究か大規模解析の研究のどちらを選択するか悩みましたが、これまで取り組んで来たウェットな研究(白衣を着用し実験をするイメージ。実際に人間が細胞や微生物などを扱って生物学的な実験を行うこと)をもう少し続けようということもあり、今の研究室を選びました。ドライな研究(コンピューターを使用し解析や実験を行うこと)にもいつか共同研究として携わるのが目標です。

研究を通して世の中で自分だけしか見ていない光景があるというのはテンションが上がります。顕微鏡を覗いて細胞内のミクロな世界を知ることはとても面白く、この分野に進んで良かったと思える点です。

研究での苦労はありませんが、実験にとっても高額な酵素を使用するので、一度失敗すると2万円が飛んでしまうというのが怖いです。全体的には楽しくやっています。

例年12月上旬には「ヤンマー&応用生物科学フットサル大会」が開催され、第3回大会では私たちのラボを含む合同チームが優勝しました。「しっかり頑張ろう！」と先生方が明るく背中を押してくださり、一緒にフットサルを楽しみました。チームワークが抜群でとても良い学科です。

巽：安藤さんは今の専攻を選んだ理由は？

安藤：今、取り組んでいるのは肝臓の研究です。体内であらゆる動きをし、病気になった時でも体調の悪さを示さない性質に興味を持ち、もっと調べたいと思いました。今は非アルコール性脂肪性肝炎「NASH (Non-Alcoholic Steatohepatitis の略)」について研究しています。NASHとは、お酒を飲まない人が脂肪肝を発症し、それが悪化して肝硬変になる可能性の高い疾患です。この病気を研究できる部屋（研究室）に所属したいという観点で今の研究室に決めました。

私はNASHの研究を専門に取り組んでいますが、部屋自体は肝繊維症をメインに扱っています。しかも先生は人工肝臓の組織を作るために3Dプリンターを導入するなど、何事にも興味を持ち、意欲的に活動しています。そのような幅広い視野と、研究に向き合う姿勢が尊敬できる点であり、今の部屋を選んで良かったと思える理由です。

また部屋には留学生が多いため、英語でコミュニケーションできるのがうれしいです。苦労したことについては、逆になりませんが、医学研究科の修士課程は、外部からの入学生だけで同期がいらないため、少し孤独です（笑）

巽：他学部の修士課程だとその大学の学部から上がっていく人が多いですが、医学部の修士課程は外部からしか受け入れられないですね。

安藤：授業の時に自分と同じ学年の修士過程が全員集まりますが、トータルで授業に出席するのは10人。その中で大学・学部卒が3人で、その他の皆さんは社会人や留学生です。本当に所属がバラバラで「何をされているんですか？」と聞くことすら楽しくて、交流の幅も広がります。

森田：海洋システム工学分野の今の研究室を選んだ理由は、自分でもはっきり覚えていなくてインスピレーションだったと思います。だいたいの物事はインスピレーションだけで選ぶ性格なので…。私は沖合に設置される波浪計測ブイの係留索摩耗に関する研究を行っています。海に浮かぶ海洋構造物は係留索によって海底と係留されていますが、波浪や潮流、海底との摩擦によって係留は摩耗します。摩耗の進行によって係留索が破断し浮体が漂流する恐れがあるので定期検査が必要ですが、現行方法である係留索を引き上げての調査や無人探査機による調査は多大な労力とコストを要することが課題となっています。そこで、本研究は数値シミュレーションで摩耗量を予測し、調査・メンテナンスの合理化を図ることを目的としています。研究室に所属して良かったことは、実験や学会・帰省などで遠出する人が多いため、お土産が豊富に揃うことですね（笑）。昨年は研究室に所属している学生の半分が外国人だった期間があり、コミュニケーションの面でも楽しかったです。

■気になる？ 理系女子の1日

巽：皆さんの1日のスケジュールを教えてください。

森田：午前6時ぐらいに起きて、体操や自分のルーティンをしています。朝ごはんを食べ、支度を整えて午前8時には家を出ます。最寄り駅まで自転車に30分乗り、1時間半ほど電車で乗り大学に到着。午前10時から正午までは研究をします。お昼はデスクでおにぎりを食べるだけの日が多いので、ぶっ通しで取り組むこともあります。友達に誘われたら外でお昼ご飯を食べ、サークルの「小型宇宙システム研究センター」に行く日もあります。

最近日は暮れるのが早いので、午後5時には大学を出ます。午後7時に帰宅して夜ご飯を食べます。帰宅時間が早い時は自宅でもパソコンで、研究の続きをすることもあります。自由時間にはテレビを見たり、気を休めたりしています。夜更かしをする体力が残ってなくて、午後10時半には寝ています。

塾のアルバイトは午後4時から午後10時の間なら入ることができます。忙しさによりますが、午後6時以降は在室しています。時間に余裕があれば、パソコンを持ち込んで研究を進めています。土日の遊ぶ予定がなければコンビニのアルバイトです。

安藤：起床は午前7時です。研究室のコアタイムが決まっていないため、ちゃんと起きることができれば、午前8時前後には出るようにしています。午前9時台に研究室に到着します。時間のかかる実験が多々あるので、ノンストップで集中していると午後4時になっていることもあり、お昼を食べ損ねることもしばしば。パソコンで作業をしている時は、正午にご飯を食べます。アルバイトがある日は午後5時半には大学を出て、午後8～9時ぐらいまで働きます。家に午後9～10時ぐらいに着いて、ご飯を食べて、お風呂入ります。その後YouTubeを見て、深夜0時過ぎには寝ます。体力的に辛いので6時間以上は寝るようにしています。

巽：研究室のコアタイムは厳しくはないですか？

安藤：厳しくありません。午前9時～午後5時と決まっていますが、学生3人のうち、最も真面目にその時間に在室している確率が高いのは私です。ベトナム人や中国人の皆さんもマイペースです。「学生だから好きにしているよ」と先生もおっしゃいます。



松本：7時間以上寝ているという、およそ博士学生らしくない超健康的な生活をしています（笑）。登校後は論文を読むなど、午前は集中して取り組んでいます。ラボのみならず仲が良いので、お昼と夕方の休憩時間には恋バナをしたりして楽しんでいます。帰宅時間は平均午後7時半くらい。バイトの日は午後5時にキャンパスを出て、1時間で移動して午後6時～9

時まで3時間ほど働きます。申請書作成に追われてる時は、午後10時頃まで死に物狂いで書いています。帰りはのんびりとご飯を食べて、漫画を読んで、犬と遊んで、好きな宝塚を見て、深夜0時には寝ています。

巽：研究室の男女比は？

松本：半々か女の子の方が多いです。席は男子の列と女子の列がありますが、性別関係なく色々な話で盛り上がります。でも誰かが研究で落ち込んでいたら全員で励まします。とても良い環境だと思います。

浅田：朝は早く起きてしまう体質なので午前5時頃に起きて、1時間ほど英語の勉強をします。午前6時から45分間ぐらいで朝食を食べ、新聞を読みます。準備をして午前8時ぐらいには大学に到着します。通学時には本を読み、英語を勉強しています。基本的には午前8時から午後4時まで、8時間が在室しています。そのうち1時間は、研究室のみなさんでご飯と雑談です。キノコの種類を当てるとか、株を買うなら何をかうとかの話で、みんなでワイワイしています。トピックが飛び交ってるんで、自分が好きなトピックになった時に雑談に入るみたいな時間が1時間あります。やがて飽きてくるのでリフレッシュのために個人的な勉強、英語などを30分くらいします。残りの6時間30分を研究に費やしていますが、ずっと研究ばかりではありません。

帰宅して午後5時半～7時の間は夕食の時間です。夕食は家族と食べたいので、そこは優先しています。弟が塾に通っているので少し早めなんです。午後7時～9時に読書やテレビ鑑賞をします。午後9時からはお酒を飲みながらリフレッシュ。テレビや雑誌を眺めてから眠くなったら就寝します。

■ IRIS の魅力は人とのつながりができること

巽：皆さん睡眠時間をたっぷりとっていて、健康的で良かったです。では IRIS についてお聞きします。参加したきっかけや入って良かったこと、身に付いたスキルなどがあれば教えてください。

森田：研究室、サークル共、私以外の女子は1人だけだったので、他専攻で同級生の女友達ができ良かったです。IRIS ではチームで取り組む機会が多く、グループワークが苦手な私にとって良い経験でした。自分が参加した企画で印象に残っているのは、「日経 STEAM2023 シンポジウム」です。本番でのプレゼンテーションコンテストの発表をする上での準備は研究に携わっているような感覚でした。

安藤：卒業して就職すれば、医療系以外の人と知り合う機会や交流するきっかけが生まれなれないと思い、一般の大学生、大学院生と関わる機会を持ちたくて IRIS に入りました。私には教育系の活動経験がなかったのですが、IRIS で他人に指導する機会があり、手応えを感じました。身に付いたスキルは、ポスターやスライドの作成です。入って良かったのはメンバーのみんなと知り合えたこと。さまざまな企画や活動ができて、とても楽しかったです。

巽：IRIS で初めて関わった活動は？

安藤：昨年のオープンキャンパスのリーダーに任命されました。それ以降も企画を立てたり、運営したり、IRIS の活動を通して自分自身が磨かれました。

巽：去年のオープンキャンパスは初めての2キャンパス同時開催で、Zoom で繋いだりとかして、結構リーダーの役割も大きかったですよね。

安藤：「2つのキャンパスの同時開催はダメなんですか」といったのは私です（笑）

巽：画期的でしたね。では松本さんお願いします。

松本：IRIS の存在は先輩と先生が教えてくれました。学会の発表において、聞く側の視点で発表することはとても大事なのですが、そのようなスキルは IRIS の活動で身に付きました。塾での指導にも役立っています。今日の座談会もそうですが、理事長とお話できる機会など、IRIS のメンバーだから実現できる活動に数多く参加できたのは、自分にとって貴重な時間でした。



巽：普段会わないような人と会えるというのも IRIS であることのメリットですね。印象に残っている企画や活動はありますか？

松本：東京都立大学で開催された「集まれ！理系女子」というイベントです。「科学者になりたいです」とはっきり主張している女子学生の姿が印象的でした。

ある先生の講演を拝聴したのですが、初めて数学の面白さを感じました。早い段階で先生を知っていたら、数学の分野に進んでいたと思うくらい印象的な出会いでした。

巽：「集まれ！理系女子」はスーパーサイエンスハイスクールのノートルダム清心学園清心女子高等学校が主催しています。スーパーサイエンスハイスクールの女子校は珍しいので、面白い体験だったと思います。

浅田：研究室の先輩が活動されていたので、同期の女の子と一緒に入りました。身に付いたスキルは、他の社会人の方々とのコミュニケーション能力の向上です。一般的に大学生は、自分より社会経験がある方と接する経験はほとんどありません。でも IRIS に参加したことにより、相手の利益を考えながら要望を押し通すコミュニケーション能力が身に付きました。また活動を通して、大学外の世界で活躍しているあらゆる分野の方々に出会えた時間はとても有意義でした。

巽：IRIS での活動で最も印象に残った企画は？

浅田：堺市教育委員会が実施している中学生向けの「企業による学びの応援プログラム」です。企業の方々から講演者として参加されている中で、IRIS 代表として講演させていただきました。会場では中学生から「浅田先生！」「すごい！」とか声をかけていただいて、スターになった気分でした（笑）。みんなから元気をもらえましたし、面白かったです。これまでは発信する側でしたが、改めて自分を客観視できた体験でした。

■ 数学や物理が苦手でも大丈夫。めざせ、理系女子！

巽：最後に、理系文系を含めて、進路選択に迷っている受験生に向けて、IRIS の皆さんからメッセージをお願いします。



浅田：私は理系に来てから別の大学への転学を考えたこともありましたし、その都度、選択期限のギリギリまで悩んでいたタイプなので、進路に迷っている人の気持ちはよくわかります。自分が思っている以上に進路はたくさん存在します。もし複数の選択肢で迷っているのなら、いろいろな情報を取得し、たくさんの人から話を聞いて、思う存分悩んでください。大事なのは自分1人だけで決めないこと。自分の考えに固執しすぎないということは進路選択では大切です。

松本：私も周囲に意見をもらいながら進路を決めてほしいと思います。ちょっとでも興味があると思うことは絶対あるので、その方向に進んでもらえたらいいかなと思います。

安藤：私の場合、進路を考える時にはやりたいことがすでにありましたが、周りのみんなは「何がしたいかわからないけど、とりあえず大学を受験する」という子たちが多かったです。もし、やりたいことがない場合、あらゆる世界に飛び込んで探してみてください。後々の後悔は少ないですし、楽しいことも待っています。

森田：周囲から希望する進路を反対されたとしても、押し切って自分の道を進んでください。

苦手だけど興味があるとか、やってみたいことがあるならば、理系に進んでも後悔はないだろうし、最後までやり通せると思います。

翼：オープンキャンパスで「数学や物理が苦手」と相談に訪れる高校生に対して「苦手科目はなんとかなる」とIRISのメンバーがアドバイスすることがあるのですが、それを聞いて「私も高校生の時にこの話を聞きたかったな」と思います（笑）。もし進路に迷ってる方がいたら、ぜひオープンキャンパスに来てください。IRISから、少しでも参考になるお話が聞けるとと思います。座談会の皆さんのように、優しく頼もしい理系女子の皆さんがIRISにはたくさんいます。理系をめざす皆さんが将来IRISのメンバーに加わる日を楽しみにしています。

一同：ありがとうございました。

■参考リンク：

○大阪公立大学 理系女子大学院生チーム IRIS Web サイト
<https://gr-knky-iris.wixsite.com/-----iris>

○IRISの活動について
<https://www.omu.ac.jp/r-support/iris/>

○松本 朋子さん研究室／細胞分子生物学研究グループ（稲田 のりこ教授）
<https://www.omu.ac.jp/agri/cmb/>

○浅田 統子さん研究室／微粒子工学グループ（野村 俊之教授）
<https://www.omu.ac.jp/eng/chemeng1/>

○安藤 美玖さん研究室／機能細胞形態学研究室（池田 一雄教授）
<https://www.omu.ac.jp/med/1kaibou/>

○森田 万葉さん研究室／船体運動&流体力学研究室（片山 徹教授）
<https://www.omu.ac.jp/eng/katayama/>



知を拓く大阪公立大学の「総合知」を体感する学び ～初年次ゼミナールと副専攻プログラム

■初年次ゼミナール

1年次全学生の必修科目として、約200のさまざまな学問分野やテーマから興味・関心に応じて学ぶ内容を選択し、グループワークやディスカッション、フィールドワークなどの能動的な学修を通じて、大学で主体的に学ぶ姿勢を身に付けます。

初年次ゼミナール 2024年度 開講科目一覧 (一部紹介)

知的な好奇心くすぐる授業テーマを開講

- | | | |
|---------------------|-------------------------|---------------------|
| ●食品を造る、売る、食べる | ●学校・学び場を設計してみよう | ●家族介護とヤングケアラー |
| ●アニマル・スタディーズ | ●グローバルヘルスを考える | ●AIとデジタル技術 |
| ●がんの発症メカニズムと予防 | ●大学から発信!!オリジナルレシビ開発 | ●大学生のメンタルヘルス |
| ●古文書からうかがう江戸時代の法・制度 | ●2040年の日本を予測する | ●発達障がいについて考えてみよう |
| ●生命を分子レベルで考える | ●文章を作るための「書かないで書く」技術 | ●身の回りの通信について |
| ●世の中を変える公共政策のつくり方 | ●地域を見る、現場を歩く、情報を得る | ●科学の視点でミミズと野菜を育てよう |
| ●ウェルビーイングと自由について | ●スマホを通して考える私たちの経済社会 | ●「感情」とは何だろう |
| ●アメリカ社会の分断について考える | ●「左と右」を考える | ●実験心理学を通じて学ぶ科学的思考 |
| ●うつ病を知り、予防しよう | ●リノベーションのデザインと大阪 | ●身近な化学物質とのつきあい方を考える |
| ●スポーツでかええるSDGs | ●「古民家 vs タワマン」どちらに住みたい? | ●日本の出産と子育てを考える |
| ●若い衰えることはなぜ不安なのか | ●ワンヘルス(人と動物と環境の健康)を考えよう | ●日本の出産と子育てを考える |
| ●株式会社と株式投資 | ●飼い主のいない猫との付き合い方 | ●など、約200のテーマ |
- ※開講科目は毎年変わります

■副専攻プログラム

ものごとを複数の見地から見つめ、考察することができる人材を養成するために多くの副専攻を開設。所属する学部・学科/学域・学類課程の区分を超えて、一人ひとりが主体的に興味関心のある分野を学修することができるプログラムです。

たとえば「創薬科学副専攻」は理学や工学、農学などの学問をベースに「創薬」について考えます。30名の枠に70名が応募する年度もある人気プログラムです。また「GC・SI副専攻」は、積極的な異文化交流を通じ、豊かな国際感覚と逞しく生きるための汎用的能力を備えた人材育成を目指した教育プログラムです。コミュニケーション能力の強化に重点を置いたグローバル・コミュニケーション(GC)コースでは、夏季休業中に英語圏で実施する約1か月間の海外学修プログラムへの参加が必修となります。

副専攻プログラム (2024年度の履修内容であり、今後変更となる可能性があります)

- | | |
|---|------------|
| ●情報システム学副専攻 | ●認知科学副専攻 |
| ●創薬科学副専攻 | ●植物工場科学副専攻 |
| ●食生産科学副専攻 | ●HR(人権)副専攻 |
| ●グローバル・コミュニケーション&ソーシャル・イノベーション副専攻(GC・SI副専攻) | |

海外留学・国際交流

本学の海外留学制度は、本学の学術交流協定締結校に留学する「交換留学」、学生が自身で選択した大学に留学する「認定留学」、春休みや夏休みを利用して留学する「語学研修・短期留学プログラム」の3種類があります。

■交換留学

交換留学とは、本学の学術交流協定締結校に1学期間または1年間留学するプログラムです。本学に在学したまま海外留学でき、留学先で取得した成績は、審査を経て本学の単位として認定される場合があります。留学中は本学に授業料を納入し、留学先大学の授業料は免除されます。

■認定留学

学術交流協定に基づく交換留学以外の形態で在学期間中に海外留学をする場合、一定の条件を満たすことにより、在学しながら留学することが認められる制度です。留学先で取得した成績は、審査を経て本学の単位として認定される場合があります。留学中は本学および留学先大学への学費の納入が必要です。

■語学研修・短期留学プログラム

夏休みや春休みを利用した「語学研修・海外短期プログラム」、語学習得や異文化交流など目的に応じたさまざまなプログラムを提供。また、本学の単位として認定されるプログラムもあります。

■キャンパスの中で国際交流

中百舌鳥キャンパスには、宿舎エリア、交流エリア、サポートエリアの3つの機能を持つ留学生宿舎施設「国際交流会館I-wing なかもず」、杉本キャンパスには、国際的な学術交流や教育・研究目的で本学を訪れる研究者等のための宿泊施設「ゲストハウス」を設置。留学生と日本人学生、海外からの研究者が生活を共にし、異文化との出会いと体験を通して、お互いの文化に対する理解を深めるこれらの施設を中心に、さまざまな国際交流プログラムを提供しています。



座談会 「海外での経験はきっと将来への糧になる」 固定概念にとらわれない、世界で活躍できる人材を育成 グローバルリーダー育成奨学金制度 第6期生 活動報告座談会

海外での活動を志望する学生支援を目的とした『グローバルリーダー育成奨学金制度』は、設立以来、多くの学生を支援してきました。そこで第6期の奨学生に、留学先での経験や同制度のメリット、グローバル志向の重要性などについてお話しいただきました。

<座談会出席者>

千田 小春 アリシアさん 大阪府立大学 生命環境科学域 3年

辻本 音寧さん 経済学部 2年

柳 健大さん 工学部 2年

池山 尚高 学生課 課長

橋本 心 学生課 職員

司会

大塚 耕司 副学長

※所属・学年は取材当時

■「グローバルリーダー育成奨学金制度」創設の経緯

大塚：まずはグローバルリーダー（以下、GLもしくはGL奨学金制度）育成奨学金制度創設の経緯についてご説明します。元々は大阪府立大学時代の2016年度中期計画「就学機会を確保し、優秀な学生を獲得するため、奨学金制度を創設する」という記載に沿って、創設に向けた話し合いを学生課と一緒に進めていました。

独自の奨学金制度を創設するという念願は以前からありました。当初、経済困窮学生の支援を含めて検討していましたが、そこは授業料減免制度で担保されていますので、成績上位者を採用する制度設計とし2017年度からの制度開始を決定しました。しかし皆さんご存知の通り、この制度は2年次生を支援対象とするため、1年次の成績や活動内容を審査し、2年次に選考する仕組みです。そのため2017年度は1年次に向けて制度に関するアナウンスの徹底に努め、GL奨学金採択をめざして頑張る学生が増えることを期待しました。

GL奨学金制度は、特待生の海外留学を資金面でサポートするだけでなく、GLとして必要な能力・国際的な感覚を伸ばす育成セミナーを実施するとともに、国際交流のさまざまな場面に主体的に参加し、リーダーシップを発揮して他の学生へのロールモデルとしての活躍が期待されています。

こうしてGL奨学金制度は、2018年度から正式にスタートし、第1期生を募集しました。応募資格はGPA3.2以上とTOEICスコア700以上というとても高いハードルを設け、上位1～2%のみが申請できる制度設計にしていました。その結果、第1期生は9名が採択され、かなりの猛者が集まりました。

それはそれで良かったのですが、2019年度の第2期生は工学域10名、現代システム科学域1名という所属に偏りのある採択構成になりました。そこで2020年度は審査基準と特待生の所属の偏りを解消するため、応募資格をGPA2.7、TOEICスコア650以上に基準を緩和しました。GPAは申請基準にのみ使用して、明確なビジョンや意気込みを持つ学生の面接を重んじたところ、制度申請者は33名という開始以降過去最多となりました。その後、選考して10名に絞りましたが、全学域から奨学生が集まった結果を受け、ハードルを下げて正解だと思いました。これまでの第1期生、第2期生に比べてバラエティに富

んだ学生が第3期生として加わり、活動内容も多岐に及びました。

ただ2020年度から2、3年は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、予定していた取り組みができない時期が続きました。でもようやく海外への出国が可能になりましたし、望んでいた活動ができるようになりました。ここからは実際にGL奨学金制度を活用している第5・6期生の皆さんにお話を伺います。まずは制度に応募したきっかけや志望動機について、3年の千田さんからお願いします。

■「先輩から教えていただいてGL奨学金制度に興味を持ちました」(辻本)

千田：受験と同じタイミングで、大学・国・各団体が行う奨学金制度を調べていた際に、府立大にGL奨学金制度があることを知りました。もともと国際的な活動に興味があり、制度を見つけた時「高校生としての経験を生かして、大学でできることがあるんだ」という希望を感じ、応募を決めていました。大学入学時はコロナ禍だったため、オンラインでの活動が中心でしたが、現在の自分を形成してくれた大きな経験でした。

辻本：大学1年次の時にエンブリー・リドル航空大学（アメリカ）との国際交流に参加した際、GLとして参加されていた先輩からこの制度について教えていただきました。海外の方とのコミュニケーションが好きだったので、国際交流や新しいことへの挑戦ができると思い、応募しました。

柳：GLの制度を知った経緯は先輩からの紹介になります。高校の頃から大学入学後は、起業と国際交流を实行しようと心に決めていました。そのため、まずは公立大から合格通知をいただいてすぐ国際交流課にコンタクトを取り、大学での国際交流について詳細を教えてくださいました。それと同時に、大学のさまざまな先輩方から公立大での起業や国際交流についてお話を聞かせていただきました。その時GLの先輩と知り合い、制度について詳しく教わり、高校生の時から数学研究部や生物研究部での活動を通して国際交流もしていたので、GL奨学金制度を活用すると部活動での経験をさらに発展させることができると思いGLに出願させていただきました。



■「科学技術を社会に应用するため、国際性を身に付ける必要性を感じました」(千田)

池山：3人とも高校の頃から国際交流に興味を持っていたということですが、そのきっかけになった出来事があれば教えてください。

柳：子供の頃から伝記を読むのが好きで、過去の偉人や研究者が大学卒業後に海外の研究機関で経験を積んでいるケースが多いと知り、漠然と（海外の研究機関に）渡航を望んでいました。公立大に進学したことでGL奨学金制度の活用はもちろん、あらゆる人々との出会いにより、それまで不鮮明だった海外渡航へのビジョンが明確になりました。

千田：私の場合、中学生の頃から研究が好きで、科学技術を社会に应用させたいという大きな目標がありました。それを達成するための方法を模索していた時、アントレプレナーシップの重要性を知りました。そんな中で挑戦した「ビジネスプランコンテスト」では、世界規模の課題に対して科学技術を用いたビジネスアイデアを立案し、国際性の大切さを改めて体感しました。

辻本：国際交流への興味のきっかけは、出身高校で行われたグローバルリーダー研修への参加です。海外留学の大学生とZoomをつなぎ、国際問題や気候変動などの課題と一緒に考えるプログラムでした。その際に英語でコミュニケーションを取ることによってグローバルな問題の解決ができると実感したので、大学でさらに学びの機会を得たいと思いました。

■「公立大を志望した理由は、国際交流に関連する施設やサポートが手厚いから」(柳)

池山：各大学でグローバル関連の制度や取り組みがありますが、本学に関してどのような部分の特徴として感じましたか？またそれを踏まえて、本学を選んだ理由を教えてください。

千田：大阪府立大を選んだ理由は、自宅から通えるアクセスの良さが大きかったです。それに広大で美しい中百舌鳥キャンパスに惹かれました。正直、コロナ禍で入学したこともあり、当初は自分がここまで多くの国際的な活動に取り組めるとは思っていませんでした。しかし、GL奨学金制度も含め、大学からさまざまな情報が提供され、活動を支えてくださったおかげで学生生活は大きく変わったと思います。学生課や国際交流課、そして公立大高度人材育成推進センターのFledgeプログラム(グ



ローバルアントレプレナーシップの連携、探求、発展を促進するプログラム)など、大学の異なる機関がそれぞれの特色を持って学生をサポートしている点が素晴らしいです。

辻本：私も正直なところアクセスが便利というのは志望理由の1つとしてありました。公立大には推薦入試で入学しているのですが、受験の機会が多いという点で選んだというもあります。先ほど千田さんのお話にもありましたが、私も教職員の方々の手厚いサポートを感じています。

柳：僕の場合は、大学間に起業してみたいという思いから、企業が多い東京もしくは大阪の大学から志望大学を選びました。そして、合格した各大学の国際交流課や研究室に連絡を取り、活動および研究内容をリサーチしました。その中で大阪公立大を選んだ理由は、国際交流施設「I-wing なかもず」で学生と外国人留学生と一緒に暮らせる制度がある点にとっても惹かれました。また学部間に海外の研究室で卒業研究が行えたり、大学院研究室と海外の大学および研究機関、双方の学位を取得できるダブル・ディグリー制度があり、国内や大学の枠を超えた研究活動を学部の段階から行えるのを知り、公立大入学への思いが一層高まりました。

■「アメリカの学生たちは自身の研究分野での起業意識が高い。焦りを感じました」(柳)

大塚：では次の質問に移りましょう。GL奨学金で実行したい活動を教えてください。すでに実行済みの場合は、その経験を今後どう活かしたいですか？

辻本：今年8月にイギリスへの短期研修に参加し、現地の生活や文化について学びました。海外でネイティブの方から英語を勉強する初めての機会だったので、自分にとって多くの学びと刺激を得た研修になりました。また不慣れた海外生活を、現地の大学職員やチューターの方々が親身に支えてくださり、楽しく充実した時間を送ることができました。この経験を活かして、今後は本学への海外留学生と交流し、留学に興味のある学生をサポートしたいです。

柳：僕の場合、他財団から獲得した奨学金を使い、今年の夏はアメリカで研究に取り組んでいました。その際の研究インターンで訪れた以外の大学研究室やベンチャー企業への訪問、アカデミアの会合参加にGL奨学金を活用させていただきました。アメリカではアントレプレナーシップが発達していることに非常に驚きました。すでに起業している修士や докторコースの学生たちが、研究分野の社会応用化をめざす熱い現場を目の当たりにして、とても刺激を受けました。おかげで自分のAI研究を活かした起業ビジョンがクリアになったように思えます。

また、留学先で出会った人たちの多くは自分の生活や生産性、生活様式をとっても大切に考えていると思い知らされました。プロジェクトの末端の方々まで明確に目的意識を持っている点も日本と大きく異なる気がします。プロジェクトを達成するため多少の自己犠牲は生じますが、基本的には自分の健康維持や家族を大切にしています。それが自身の生産性を高くキープし、最終的にプロジェクトの生産性向上につながるということを理解しています。日本での自分は、日常生活を大切にせず無茶ばかりしてやりたいことをやっていたのですが、それだと定期的に体調を崩し、結局生産性を下げてしまっていました。海外渡航により、自分の健康とプロジェクトに向き合っている方々に出会えたことで、自らの限界を知り、生活様式を変えることができました。

池山：素晴らしいです。アントレプレナーマインドの面や学生起業家が多い状況に関しては、海外に比べて日本はかなり立ち遅れているという認識ですか？

柳：そうですね。(日本と比べて)まず圧倒的にアントレプレナーの知識がある学生の数が全く違います。今、日本の研究室に所属させていただいていますが、ほとんどの学生は社会実装に関して他の誰かがやってくれるだろうと考えている人が多く、研究技術や社会応用のメリット、応用する道筋などを考慮に入れた研究テーマの設定などができていないように感じます。し

かし、僕が研究留学で出会った海外学生の傾向から考えると海外の学生は起業も視野に入れて研究計画をするため、自分の研究対象がどのように社会応用までの過程を明確に持っていたり、研究に対するモチベーションが高かったりと、研究への姿勢や意識に格段の違いがあります。

千田：シリコンバレーだと高校生の時点からアントレプレナーシップ教育が始まっていると聞き衝撃を受けました。シリコンバレーの私立高校で教鞭を取られている MBA の先生に教わったことがあり、早期からの意識変革の重要性を体感しました。

■「GL 奨学金制度を取得したことで、海外渡航への背中を押してくれました」(千田)

千田：私はコロナ禍だった 2022 年度に GL 奨学生として採択されたので、当初はオンラインでの活動を余儀なくされました。内閣府の青年国際交流事業や、外務省の対日理解促進プログラム、米国領事館の学生のプログラムなど全てオンラインでしたが、とても充実した学びの時間を過ごせました。おそらくこれだけ並行して同時に進めることができたのは、オンラインだったからこそと思います。

採択 1 年目の後半からはコロナ禍の水際対策が緩まり、海外渡航が可能になりました。実は大学入学後に海外への渡航は考えていなかったのですが、GL 奨学金制度により資金を得たことで渡航への後押しをしてくれたのはとても大きかったです。

海外渡航に関しては、タイへの講義受講 (Fledge プログラム) や、韓国への短期研修プログラムに参加しました。また外部のエージェンシーを通じて UAE とバーレーンにも行きました。渡航経験は現在の活動につながっています。

大塚：GL 奨学金を使った渡航経験で皆さんのマインドが変化し、成長してくれているのはうれしい限りです。コロナの話がありましたので、コロナ禍を経て、物事に対する視点や着眼点がどのように変化したのか教えてください。

千田：コロナの影響で活動がオンライン化されたことが、身近に感じた一番の変化でした。でももう少しグローバルな視点で世界を見ると、社会情勢は世界の変化や情勢と密接につながっていますし、見えないところでもつながっています。だからこそグローバルな視点を持つことはとても大事だと感じました。

やはりコロナ禍により各国が閉鎖的になってしまい、人々も閉鎖的になり、グローバル化によって進んでいた人間の寛容性が一部失われてしまった感覚があります。世界的に「内と外」の意識が強まり、それこそ今世界では 2 極化による分断の傾向が高まっていると思います。だからこそ今の若い子たちには、先入観にとらわれず、どんどん垣根を越えて広い視野をもって欲しいなと思います。

異なる「国」だけでなく、異なる「分野」から学ぶことも大事だと思います。私の活動先にはあまり理系がならず、社会科学や国際外交などに関連する学生が多いため、多くの刺激を受けます。専門外だからこそ学ぶ意義はあるし、これから分野を超えた学びは更に重要になると思います。理系の学生が世界とつながることで、双方に新しい視点や刺激を与えてくれるはずですよ。

大塚：2 極化というと 2020 年を思い出します。世界中が全て「自国は、自国は」という意識になってしまい、その延長線上に各所で争いが始まりました。逆に賢い人間であればそれを反省点にすべきだと、千田さんの話を聞いてそう感じました。

柳：僕はコロナ後から活動を始めたので比較はできませんが、グローバルな視点を持つということ考えた場合、「思いやり」、「チャンス」などのキーワードを連想します。まず、グローバルな視点を持つことで、国内の問題解決をした場合、ローカルな問題解決の手法を他の地域・海外のローカル問題を解決することにも転用可能であることに気づきます。世界的な視野を持つことにより、類似の問題で困っている多くの人々にソリューションを提供できることに重要性があると考えます。これは同時に、海外の事例が日本国内問題の解決手法を見つける手掛かりになっていることを示しています。次に、国内の問題解決の影響について地球上は繋がっているためグローバルで影響を考えて、国内の問題解決の手法を修正したり、よりグローバルな問題解決策を策定できたりするようになります。グローバルな視点がないと、ローカルな問題解決の際に、他の地域への影響



が考えられていないという問題や問題解決策の見本を探しづらい問題がありますが、グローバルな視点を持つことで解消されるのではないのでしょうか？

■「コロナ禍が改善した今だからこそ、海外との架け橋になれる人材が必要です」(辻本)

辻本：コロナの影響で海外との往来がなくなったことで、日本と海外は強いつながりがあったのだと強く感じました。コロナ禍が徐々に改善しても、元の関係に戻ろうとしている今だからこそグローバルな視点を持っている方や、海外との架け橋になれる人材が今後さらに必要になると思います。

池山：現在の 3 年次生はコロナ禍により「失われた 3 年間」と言われ、高校 3 年生から始めて最も活動が制限された年代です。3 年の千田さんは活動が制限される中でどのようにモチベーションを維持してきましたか？ 逆境に対してどう捉え、行動してきたのか教えてください。

千田：逆境をポジティブに捉え、自分の力に変換していったことが、自分がコロナ禍を乗り越えられた要因だと思います。大学に入学した際は全てオンライン授業でした。私は高校時代、みんなが前のめりで授業に参加する教室での学びが好きだったので、オンライン授業には一切その雰囲気はなく、画面越しの一方的な講義は全く楽しめなかったです。

ですが、夏休みの時期に、国際交流課の掲示板でオンライン留学の情報を見つけてから、世界が変わりました。まだ渡航するには不安定な時期だったので留学は考えられていませんでしたが、オンライン留学なら自宅から学べることに魅力を感じ、参加を決意しました。

しかし、やはりオンライン留学では、毎日長時間画面と向き合いながら慣れない英語を喋っていたため、本当にストレスがかり、蕁麻疹も出たくらいです。でも画面越しでノンバーバルな意思疎通が難しい状況だったからこそ、自分の英語力の低さをひどく痛感し、それが逆にバネになって、英語の勉強に力が入りました。やはり逆境を力にするポジティブな精神は、成長する上で大事だったと思います。



■「好きな国に行きたいという思いでも GL を志望する理由になります」(辻本)

池山：柳さん、辻本さんはコロナ禍の際に心がけたことはありましたか？

柳：僕の場合は、コロナ禍が高3の頃と受験期とかぶってしまったため影響が少ない方だと思いますが、シンガポールで開催される数学の国際大会に出場する予定だったのが、全てオンライン開催になりました。海外の人と直接的な交流をできなかったというハンディキャップがありましたが、不思議と自分の限られた環境の中でもやりたいことが無尽蔵にあったため不便はしませんでした。オンラインでも授業が提供されていましたし、手元でできるやりたいことがあったので、でも出国できない窮屈さは感じていましたね。

辻本：高校生の時にもイギリス研修に参加しようと思っていましたが、コロナの影響で中止になりました。出身高校に入ったのもイギリス研修があるという理由だったので当時は落ち込みました。でも高校がグローバルリーダー研修や、国際交流のオンライン開催の機会を設けてくださったので、モチベーションを保つことができました。子どもの頃からハリーポッターが大好きで、いつかイギリスに行きたいと思っていました。

大塚：コロナ禍により大学での授業や会議がオンラインでの実施になりました。私たちは大学統合に関する会議もたくさん行いましたが、オンライン開催で良かったと思います。対面開催だと複数の会議が各地で行われるため、移動が難しくなり、授業に差し障りが生じる可能性がありました。良くも悪くも、コロナは世の中の変革を進めてくれたという一面はあります。

■「GL の先輩方の活動を共有することで、現役学生たちのビジョンが鮮明になる」(柳)

大塚：では次の質問に行きましょう。グローバルリーダー育成奨学金制度を継続することで感じる意義を教えてください。また制度の継続が大学に対してどのように還元されていると考えられますか？

柳：GL 奨学金制度を継続することにより、GL の先輩方の活動内容が脈々と蓄積されていきます。先輩方における大学時代の活動および享受できるメリット、その経験を元に社会人としてどのような活動を新たに実践できているのか。現役のOMU生は、それらをリンクした有益な情報にアクセスできるため、将来へのクリアなビジョンを持つことができます。

さらに GL 奨学金制度があることで、資金面で諦めざるを得なかった海外への留学プランを実行でき、人々との交流機会を作ることができます。さまざまな自分の可能性を広げてくれたという点において、とても意義のある制度です。

また GL 奨学生は活動の様子を SNS から発信し、国際交流の面白さや重要性を継続的に伝えていきます。その投稿をチェックすることにより、OMU 生が「海外活動をしてみたい！」と思ってもらえればうれしいですね。あらためて、海外交流をより身近に感じてもらえるプロジェクトだと感じています。

辻本：プログラムの継続により、縦と横の関わりが生まれています。千田さんのようにたくさんの経験をされている先輩方や、柳くんのようにいろんなことにたくましく挑戦する同期がいるおかげで、新しいことへのチャレンジに背中を押してくれるきっかけになると思います。

私も先輩に教えてもらったというご縁で、GL に参加することができました。GL 奨学生は互いに切磋琢磨しながら各々の活動をしていきますが、1つの物事に取り組む時は、協力して知恵や知識を出しあい解決をめざします。そんな高めあえる存在に出会えるのが、プログラム制度の意義だと思います。

千田：お2人のお話を聞いて、GL 奨学生の つながりを意識的にもっと大切にしたいと思いました。GL 奨学金制度を大学が設立、継続してくださっていることは、グローバル意識を持った学生の応援になっています。私自身も GL 奨学金制度があったから、自分の活動に自信を持てるようになり、活力になっています。専門と異なる活動に取り組むことは少なからずプレッシャーを感じるものです。そういう意味でも、GL 奨学金制度は「大学が応援してくれているんだ」という大きな心の支えになっていました。

今後、海外に行く学生がもっと増えると思いますが、資金面により渡航をあきらめる学生も増加すると思います。でも奨学金での支援により、そんな学生たちに自由と希望を与えています。本当に意義が高い制度だと感謝しています。



大塚：皆さんが話してくれたように、縦と横のつながりにより、GL、奨学生チームのようなものができあがりつつありますし、それを次の代に継承したいという意識も芽生えているように感じます。1人ひとりがインフルエンサーとして他の学生に与える影響力はありますが、奨学生チームが丸となれば、もっと大きなインフルエンサーとしての力が生まれます。そこには今後期待したいですね。

また冒頭で話してくれましたが、当大学の特徴の1つであるアントレプレナーシップ教育は、GL奨学金制度とうまく呼応しているように感じます。双方を上手にリンクさせて活用する学生も見受けられます。私たちが重要視するこれら2つの制度は、本学を志望する学生が増えるための要因になってくると思っています。

池山：GL奨学金制度は大阪公立大学教育後援会が全面的に支援しています。本日のお話を聞いて、皆さんはとても有意義に使っていただいていると感じました。実際に活動されている皆さんにとって、奨学金の30万円という金額は妥当と感じていますか？ご意見をお聞かせください。

千田：私の場合、活動時期の前半はコロナ禍のためオンラインでの活動だったため、全て無料でした。しかも複数の活動に取り組んでも費用が必要なかったというのはとても大きかったです。でも後半は海外での活動が再開できたため、2年分（千田さんは継続2年目）の奨学金をほとんど使い果たしました。特に現在は円安の持続化によりレートが高いですし、インフレーションが加速し続けている社会情勢を考えると、資金援助は必要だと思います。

橋本：学生課としては、GLの皆さんは本学のロールモデルになる存在だと認識しています。GL奨学金制度を継続することで、新たなGLを誕生させることができますし、皆さんがさまざまなフィールドで活躍することで、学生にも刺激や影響を与えることができます。また入試説明会などでGLの活動を紹介していただくことで、受験生の皆さんが大学での学びに夢を描いていただけるのではないかと期待しています。受験勉強へのモチベーション向上にもつながるはずです。職員としてはGLになった学生を全力でバックアップしていきます。

■「専門分野にとらわれず、海外にも視野を向けて挑戦を！」（千田）

大塚：では最後に、高校生に向けたメッセージをお願いします。

千田：高校生に対して願うのは、学問の専門分野や自分の居場所にとらわれず、どんどん挑戦してほしいです。どのような大学でも活動するためのサポート制度は存在するので、積極的に探してみてください。常に新しいことを学び続けるという姿勢で、楽しんで大学進学に向けて準備してほしいです。

辻本：新しい物事に挑戦することに慎重になってしまう方は多いと思いますが、そういう方もOMUに入學すると、千田さんや柳さんのような先輩の存在を知って刺激になるはず。GL奨学金制度の活用が、新しいことに挑戦するきっかけにつながればうれしいです。

柳：僕が今感じている大学に入ることのでられるメリットは、活動の質や幅、自分のコミュニティを広げること。この3点が大きいです。まず、活動の質や幅ですが、大学に入ればあらゆる専門分野のトップの教授がいて、先生方と話をすることで専門的な知識をより深めることができます。また大学生としてさまざまな活動を探る際に、例えば公立大だと学生主体で運用されているSSSRC（小型宇宙機システム研究センター）や、フォーミュラカーを製作している団体など、課外活動以外にも多くの団体があります。高校の時には金銭的、技術的に不可能だった活動が大学で待っているの、ぜひワクワクして大学の門をたたいてほしいです。また、コミュニティを広げる点についてですが、高校までは地域ベースのコミュニティで活動している人がほとんどだと思いますが、大学に出ると興味ベースの国内・国際的なコミュニティに入ることが容易になり、国内・国外の興味を共有できる人と繋がりがやすくなります。大学入学後は、自分の好きなことを切磋琢磨して取り組める友人を大学や国にとらわれず見つけてほしいです。さらに、何かしら活動しようとした際に、大学や国、財団によるサポート体制が充実

しているので、それを自分でつかみ取れるよう、積極的に行動するとより充実したキャンパスライフを送れるのではないのでしょうか。ぜひ思いっきり大学生活を楽しんでください。

橋本：大阪公立大学はグローバル戦略に基づいて、将来グローバルな視点と深い専門性を兼ね備えた国際性豊かなリーダーとして世界に貢献する人材の育成をめざし、学業、人物ともに優秀な学生に対する奨学支援として、大阪公立大学GL育成奨学金制度を設立しています。対象は2年次の学生となっていますが、申請時に1年次の成績や学力テストの結果、社会活動の実績などが応募の資格要件となります。なかには千田さんのように高校生の頃からGL奨学金制度を目標に掲げていらっしゃる方もいますので、興味のある方は、積極的に大学に問い合わせてみて欲しいと思います。

大塚：今日、座談会に参加してくれた皆さんは、高校の時からビジョンを明確にし、それに向かって大学を選択しています。ぜひ受験生の皆さんも、先輩たちのように自分のやりたいことをしっかり持って、志望大学でどういった活動ができるのか。どのような先輩がいるのかということをしっかりリサーチして、積極的に行動してください。その答えが大阪公立大学であれば、こんなにうれしいことはありません。本日はどうもありがとうございました。

一同：ありがとうございました。



インタビュー

私たちのチャレンジ

— 「総合知」「共創」、そして未来へ

辰巳砂 昌弘学長に聞く

— まもなく開学3年目を迎え、2025年秋の森之宮キャンパスの開設も視野に入ってきました。“本格始動の春”ともいえるこの時にあたって、あらためて大阪公立大学の「総合知を大切にしたい教育」について、ご紹介いただきたいと思えます。

2021年の3月に閣議決定された第6期の「科学技術・イノベーション基本計画」では、我が国が目指す社会（Society5.0）の実現に必要なものとして

- ・サイバー空間とフィジカル空間の融合による持続可能で強靱な社会への変革
- ・新たな社会を設計し、価値創造の源泉となる「知」の創造
- ・新たな社会を支える人材の育成

の3つが挙げられていますが、これらをまとめて、「総合知による社会変革と知・人への投資の好循環」が今後の課題として求められるとしています。



第6期の基本計画は気候危機や新型コロナウイルス感染症などの喫緊の諸課題を踏まえて策定されてきたのですが、このような人類的な危機への対処の方略として「総合知」が掲げられたのは非常に意義深いものだと考えています。もちろん「総合知」のもつ意義は昔から論じられてきたものですが、コロナ禍などの社会変容もあって、広い視野に立って政策決定していくこと

の重要性を私たちはあらためて思い知らされました。言い換えると、「よりよく生きる＝Well Being」という大きな観点にあまり目を向けずに、単に「専門知」だけを追究していればよいという時代ではなくなったということです。

ただ、これまでの大学はどちらかと言えば閉鎖的な空間で、学問領域間や学内外の連携などにはあまり情熱を傾けてはいませんでした。私たちは、2025年秋に開設する森之宮キャンパスのコンセプトを「知の森」としていますが、それはまさに「木を見て森を見ず」の状態から脱却し、広く高く視野をひろげて「木も森も見る」ことのできる大学を目指しているところです。

— 「総合知の探究・創造」はまさに時宜を得たテーマだったということがよくわかります。いわば「時の利」を十分に生かしながら新しい大学づくりが進められたということですね。「時の利」以外にも、「総合知」を具現化していくための条件が必要だったのではないのでしょうか。

その点でも本学は非常に恵まれた状況にあったということが言えます。いくら「総合だ、総合だ」と理念ばかりを訴えても、それを可能にする学内の研究資源、教育資源、それらを支える重厚な組織などがなければ、掛け声倒れになってしまいます。本学は「時の利」も享受しながら、「組織の利」にも恵まれていたのです。

本学は「公立大学法人大阪」のもとに大阪市立大学、大阪府立大学を統合して設置されましたが、それぞれの学問領域は相補

的であり、「総合知の探究・創造」に最適な環境が備わっていました。大阪市立大学が得意としていたのは人文社会、医学、理学の分野です。大阪府立大学が得意としていたのは理工系、農学系です。つまり両者が相補いながら広大な学問領域をカバーすることが可能になったわけです。

本学の学士課程は1つの学域と11の学部で構成されています。医学部と獣医学部が同じ大学に設置されているなど、領域の多様性や充実度は非常にユニークです。つまり本学には他の公立大学の追随を許さない「組織の利」があったということです。ほかに大学院としては、以上の13の組織に対応した大学院のほかに、都市経営研究科と情報学研究科の2つの独立研究科を擁しています。学生数は約16,000人。まさにこのスケールメリットこそが「総合知の探究・創造」を可能にしているのです。

— 「総合知」とならんで「共創」というキーワードもありますが、この2つの関係はどうとらえればいいのでしょうか。

これまでよく、「産学連携」と言われてきました。たとえばより性能のいい機械を生産して業績を上げたいという産業界の要求と、研究成果を活かしてみたいという大学側との要求を合体させるという考え方です。しかしこれでは、産業界も大学もそれぞれが自己目的の実現のために動いているというスタンスになりかねません。両者が力を合わせることでまったく新しい価値を生みだし、それが結果的に両者のメリットとして還元されてくる…、そういうスタンスではありませんでした。

「共創」は文字通り、「共に」新しいものを「創造」していくことです。さきほど述べた「総合知」にも絡んでくる話ですが、サステイナブルな社会の実現など、さまざまな知見を持ち寄りなければならない社会的課題が山積しています。また、地球全体という大きな話ばかりではなく、ここ大阪の足元でも「共創」していくことで解決できる社会課題はたくさんあるはず。となると、単なる「産と学」だけの共創ではカバーしきれないということが明らかになります。ですので、私たちは「産・学・官・民」の共創が必要だと考えているのです。

「産学官民共創で社会課題を解決し、新しい社会を創造する」拠点として「イノベーションアカデミー（i a）」を開きました。i aでは現在ドイツ人工知能センターとの連携のもと、「スマートシティ」「スマートエネルギー」「スマート農業」「スマートヘルスケア」「子ども未来社会」の5つの共創研究ユニットが駆動し始めています。これも本学が目指す「知の拠点となる高度研究型大学」の一つの方向を指し示しています。

— 「総合知」の大切さはよくわかるのですが、そうするとこれまでの「専門知」の位置取りはどうなるのでしょうか。

一方で「専門知」も非常に大切で、専門知があってこそ総合知です。基本的には専門知をしっかりと学び研究することが必要です。ただ、そのこと自体が究極の目的なのではなくて、そこで得られた知見がどう生かせるか、未来社会に向けてどんな風にその成果が羽ばたいていくかという将来への展開可能性を常に意識しておくことが必要なのです。言い換えると、いつでも新しい学びに取り組めるように、新しい学びに必要な知見を「引き出しに入れておく」ということです。

たとえば、私は安全性が高く長寿命な全固体電池の開発研究に取り組んでいました。私の立場は無機材料化学です。しかしこの研究が実用化されて世に出た時にどう使われていくのだろうか、その研究で人々は幸せになるのだろうかということを考え始めると、化学の世界だけではもう手に負えなくなります。この問いに答えるには技術畑だけではなく、自然科学に加えてたとえば心理学や経済学、さらに



は哲学のような社会科学、人文科学のさまざまな分野の知見を総動員していかなければなりません。

つまり「総合知」を創出するために数多くの「専門知」が必要になってくるわけです。最初から「総合知」を目指して研究するというわけではないのです。ですから学生の皆さんには、これまで人類が築き上げてきたさまざまな叢智の結集である「学問（専門知）」をしっかり学びとっていただきたいのです。そのために学士課程という入口が用意されているわけです。

――大学に進学したいと思っている高校生は、たぶん「文学を研究したい」「システム工学に興味がある」などというように、これまでの学問分野をイメージして進路選択してくると思います。学士課程での、言わば専門知への接近と、掲げている「総合知」への接近との2つをつなぐ“架け橋”をどう提供していくかは難しいではありませんか。

そうですね。これからの課題もたくさんあるのですが、例えば「初年次ゼミナール」という本学の授業はその“架け橋”の一つに位置付けてもいいのかなと思います。「1年次全学生の必修科目としてさまざまな学問分野やテーマから興味・関心に応じて学ぶ内容を選択し、グループワークやディスカッション、フィールドワークなどの能動的な学修を通じて、大学で主体的に学ぶ姿勢を身に付ける」のがその趣旨です。

このゼミナールでは、1つのテーマに対し、同じような「興味・関心」を持つ学生がさまざまな学部・学域から集まります。授業は全学の教員が担当し、あとの資料にあるように、文系、理系を問わず約200のテーマが用意されています。

一例として「古民家 vs タワーマンション」どちらに住みたい？というゼミナールは次のような活動が行われました。

大工棟梁の経験と勤でつくられた古民家と最新の工学技術によりつくられたタワーマンション、どちらに住みたいか？ 代々住み継がれてきた古民家と代々住み継がれるかわからないタワーマンション、どちらに住みたいか？ 現地見学を行い情報収集して、ほかのメンバーと課題や新たな可能性について議論し、自らの（先入観を乗り越え）考えをまとめてプレゼンテーションをしました。さらに成果を最終報告書にまとめ、関係者にフィードバックしました。

このゼミナールは工学部建築学科の教員が主催したもののなのですが、このテーマを追究するなかで、学生たちは単に建築技術の問題だけではなく、歴史の重みとは何か、合理性とその限界とは…などさまざまな課題を発見したはずで、民家とタワマンという何げない切り口からも、「俯瞰して、総合的に考える」ことの大切さや面白さに気づいていったはずで、

こうして高等学校時代とはまったく異なる「考える」作法をアップデートして、それぞれの専門へと進んでいくわけです。

実はこれとよく似た発想の試みはかなり以前に神戸大学教養部（当時）の「G」という制度でも行われていました。所属の学部とはまったく関係なしに集まるわけですから、一つのGに文学部や工学部や医学部などさまざまな学生が集まってくることになります。そこで互いに異なる価値観や人生観、世界観に出会います。それは各学部での専門の学びと同様に、学生時代の貴重な思い出になっていたようで、卒業後もGの仲間との交流が何十年も続いているという話を聞きますが、それも大学という場での一つの貴重な学びがそこにあったからだだと思います。

――大阪公立大学ならではの研究教育組織としてはほかにどのようなものがありますか。

学部組織は1学域と11学部からなっていますが、この「学域」というのが本学の1つのユニークな組織なのです。「学域」は、文理融合した広領域の課題を追究しようとした研究教育の場として大阪府立大学において2012年にスタートした試みですが、内容的には本学が目指す「総合知」の視点を先取りしたようなものでしたから、教育組織の目玉として継承発展させて、学部と並ぶ学士課程の一つとして位置づけたわけです。

現代システム科学域では全入学定員260名のうちの60名を学類ではなく学域単位で募集しています。この学域のスローガンとして「初年次から一貫した教育でサステナビリティ志向性を獲得」「学問分野の壁を超えた領域横断的応用力とシステムの思考力を獲得」「課題解決型のPBLプログラムで実践力を強化」の3つを掲げています。

初年次の必修科目を履修したあとは「知識情報システム学類」「環境社会システム学類」「教育福祉学類」「心理学類」に分かれます。詳しくは大学案内冊子を参照してほしいのですが、このスローガンだけ見ても、この「学域」が本学のめざす方向の一つの具現だということがわかるのではないかと思います。

また、農学部応用生物科学科と獣医学部が連携した「食生産科学副専攻」、農学部応用生物科学科と緑地環境科学科が工学部と連携した「植物工場科学副専攻」など「副専攻」というカリキュラムを展開していますが、これも学問領域横断的な私どもならではの挑戦です。

現代的な視点から思想・文学・演劇・音楽・美術・映画・モード・サブカルチャーなどを対象とした比較研究を展開する「文学部・文化構想学科」や、気候変動や社会構造の変化への適応策、循環型社会やスマートシティに必要な要素技術と、それらを融合し歴史・文化を継承し創造するための計画・設計・構築・保全を行う技術を習得させる「工学部・都市学科」なども、「総合知」への接近を意図した新しい研究の方向性を示していると言えます。

さらに、2024年度から、3年生を対象とした「高年次ゼミナール」もスタートします。具体的な展開はこれからの課題ですが、初年次ゼミナールと高年次ゼミナールという「総合知」への2つのアプローチで学士課程を包むというユニークな発想です。ほかにも学部・学域間の垣根をできるだけ低くして、「知の総合化」が掛け声だけに終わらないような努力をしています。

――最後に、学生たちにどんな夢を託したいとお考えですか、お聞かせください。

私は『大阪公立大学2025』という大学案内冊子の「挨拶」ページで、次のように記しました。

長い人生の中で、大学で過ごす年月は短いのですが、これほど自由を謳歌できる時は二度とありません。自分の裁量で自分磨きを出来るのが大学で、学問との出会い、人との出会い、ここでのすべての経験は皆さんの将来の財産になります。

大学とはそういう場所なんですね。自由に考えること、さまざまな学問や人との出会いは既成概念をほぐし、新たな視点を生む…、そういう経験を経ることで人の思考はおのずから「総合」「共創」を目指す方向に広がっていくのです。大学自身もこれまでの研究一辺倒の世界から抜け出そうとしています。SDGsが叫ばれAIが人類に挑戦してこようとしている今日、大学も変わらなければなりません。

困難な課題に果敢に挑戦していかなければならないという意味では、大阪公立大学も、本学で学んでいる学生の皆さんも、これから本学を目指そうとしている若い人たちも、同じスタートラインに立っていると言えるでしょう。



<左：中百舌鳥キャンパス 右：杉本キャンパス>